



二人の漱石 熊本と牛込と私

黒川 清 (東京大学名誉教授、
政策研究大学院大学名誉教授、
日本医療政策機構代表理事)



昨年、2017年は夏目漱石の生誕150年(1867慶応3年
1916大正5年)を迎えた年だった。一昨年、2016年は漱
石の没後100年でいろいろな番組やイベントが開催されたばか
りなのだが、近代日本の文豪を偲んで多くの事業が開催されるのは
うれしい。今回は漱石の没100年、生誕150年記念という企画
の一つということで、これもうれしいことだ。

ところで夏目漱石は1900年の渡英直前まで、熊本にある第五
高等学校(以下は「五高」とする)で教師をしていた(1986
1900年)ことはよく知られている。何を隠そう、私の両親とも
熊本市の出身。父は黒川宗雄(1907-1980年)、五人の弟
と末が妹という七人兄弟妹の長男、熊中一五高から、東京帝国大学
医学部を卒業、東大の呉内科で内科医の修業、国内の公務ののち戦
後に牛込柳町で開業した。父の大学時代になると兄弟はほとんどが
東京に出てきて大学で学び、公務員、企業人として活動しており、
ほとんどが荻窪あたりに居を構えていたのでよく行き来していた。

私は東京の生まれ(昭和11年、1936年)で、記憶にあるの
は杉並区荻窪二丁目の自宅からだ、本籍は「熊本市本荘5-13」、
黒川家の実家で、黒川家のお寺はその近くの実相寺だった。父方

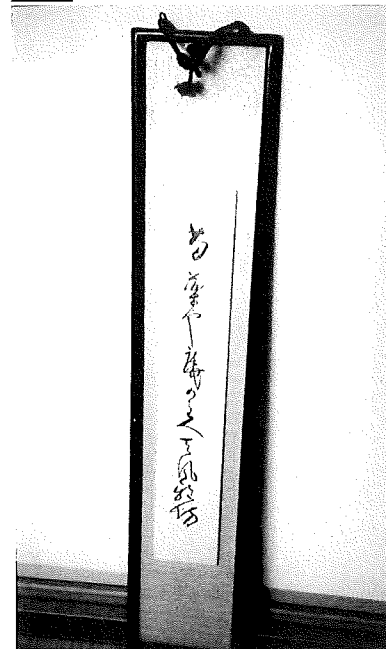
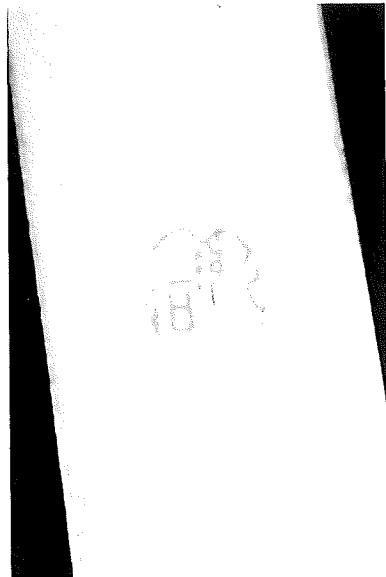
の曾祖父の脩(おさむ・嘉永6年1854年生まれ-昭和3年
1928年没)も、祖父の翼(たすく・明治10年1878年-昭和
7年1932年没)も内科医だったということは聞いてはいたが、
曾祖父、祖父とも私の生まれる前に亡くなっていて、祖父も写真で
しか知らないでいたのだ。祖母の「トヨ」は長寿で、一人になって
からは東京に暮らし、一緒に住んでいたこともあるし、いつも身近
に感じることができた人だった。

私の母、百合はやはり熊本の生まれで、母方の祖父は熊本市の莊
嚴寺の「続」家の長男の有節、祖母は「ふさ」。祖父は長男だったが、
濟々巒一五高、東京帝国大学に進み、教育者として金沢、台北の師
範学校などで教鞭をとっていたと聞いている。だから私の母は台湾
女子師範学校付属でも学んだと聞いていた。

母方の祖父の一家は荻窪のころ、つまり私が幼稚園、小学校のこ
ろはすぐ近くに住んでいて、子供心にも祖父母ともとても立派な人
と感じていた。祖父は莊嚴寺の跡継ぎにはならず、今は隆法、信隆
さんに続く三代目の隆之さんがご住職さま。一昨年、熊本を訪れた
折に20年ぶりに莊嚴寺を訪ねることができた。20年前には続家の墓
があったのだがこれもモダンな施設に変わっていた。母は下に男、



黒川漱石



黒川漱石の俳句短冊と短冊の裏の印

女、男、女と5人兄弟の長女で、みな東京に出てきていたが、長男の有恒ありつねは名古屋大学で教鞭をとっていたし、末弟の有信は40歳ほどで、結核でなくなつた。私が生まれたころはこちらの祖父母と有信おじさんも、父方の叔父叔母と同様に近所に住んでおり、こちらもよく行き来をしていた。

私は黒川家の長男と、続家の長女、つまり両家にとつての初孫であり、とても大事にされていたに違いない。幼少のころは病弱で、小学生は近所の国民学校桃井第二小学校で、雨が降ると休むことが多かつた。戦時にはたまに卵、バターなどが手に入ると「まずお兄さんから」、ということもあつたから、妹、弟には子供心に食べ物の恨みを持たれていたかもしれない。幼少のころはご多分に漏れず「胸に水がたまつて」いた時期もあり、これは当時は先進国でも一番の死因であつた結核だつたのだが、戦後になつて栄養状態の改善

とともに特效薬ストレプトマイシン(6)が日本にも届くようになり、回復に向かつたのだろう。中高校は吉祥寺にある成蹊学園で、学校には自転車を通つていた時もあるほどで、すっかり元気になり、一日も休むことがなかつたと思う。

私の下には女(博子)、男(洗)、男(湛)の妹と二人の弟。終戦の年の三月の東京大空襲の時には自宅の周辺は大きな被害は受けなかつたものの、庭に掘つてある防空壕にもぐり、東方の空が真っ赤になつてゐるのを見てゐる。また自宅のすぐ近くに米軍機が落ちた。その後、福島の猪苗代湖の翁島の近くの金田かねたま金曲に子供たちと母は疎開した。終戦後の秋に荻窪に戻つた。私と博子、洗とも中高を、そして末弟の湛は小中高を成蹊学園で学んだ。

幼いころから両親、親戚から私の曾祖父も祖父も、熊本で医師(内科医)として活動していたと聞かされていたので、長男でもあ

り、一浪のあと父親と同じ東大医学部への道を進んだ⁷（当時の東大医学部への道筋は、教養学部は「理二」に入学、医学部進学へはまた試験があり、ここで落ちると退学、浪人、次の年にまた医学部受験という制度が基本だった。「理三」ができたのは1962年）。妹は薬剤師に、次男、三男は時代の花形、工学部へ進んだ。医師としての私の履歴は、日本ではかなり「尋常ではない」のだが、今は便利なもので、私のウェブサイトを⁸見ていただくと、その「ズレ方」が見て取れる。医師になった頃からの数年では、こんなことになるとは、私にとつてもまったく予想もできなかったことばかりの連続で、今の私のあるのは、その時々によくの方とご縁とご薫陶、そしてご支援をいただけたおかげだ。

2016年9月、英国ロイヤル・バレエ団が来日した。ひよんなご縁からバレエ団の東京公演の時に私から旧知の蒲島郁夫知事への電話で、バレエ団の博多での公演の機会を使って、地震の後で大変な熊本へのプリンシパルなど数人の慰問訪問が実現した⁹。この訪問を新聞記事などで見て、とてもうれしかったのを覚えている。その後、蒲島知事からバレエ団訪問のお礼の電話があり、さらに「ところで記者会見で、『知事の言われる黒川さんとは、黒川漱石と関係があるのか?』と聞かれたのだが」と問われた。思いもかけないことだったのだが、「それは私の曾祖父で、医師でもあり、「もう一人の漱石」とも言われていた人だ、いつか調べてみたいと思っただので、その質問した方を紹介してください」というのが私の返

事だった（このあたりのやりとりについては（11）を参照）。その年の秋に熊本と東京で行われた創作劇「漱石の四年三カ月」の東京公演の機会に、熊本の「漱石」に関係する方たちにもお会いすることができた¹⁰。この創作劇は、熊本時代の夏目漱石が、かなり年長の医師であったもう一人の医師で俳人「漱石」に出会うエピソードも入れた物語で、浜畑賢吉さん¹¹が主演で夏目漱石の役をするなかなか楽しめる作品だった。

その後、2017年に熊本を訪問する機会にも教えていただいたところによると、医師としての黒川脩が「漱石」を名乗っていたのは江戸時代に熊本の細川幽玄公の始めた俳句の細川藩の第9代宗匠としての名であったということなのだ。「漱石」の意味¹²はご存知のように「負け惜しみが強い」といった意味である。夏目漱石も、名は金之助なのだが勿論この意味を知って名乗っていたのだろう。

医師となった私は、東大紛争の終焉となる機動隊と学生の衝突が東大時計台の炎上にいたった昭和44年（1969年1月）の夏から、2年の予定で米国のペンシルヴァニア大学での研究留学に旅立った。しかし、自分でも予想できないことに、この時から米国に居続けることになる。ヴェトナム戦争が米軍の北ヴェトナム爆撃へエスカレートしている時代だ。2年後にロス・アンジェルズにあるUCLAに移り、次の2年、3年でカリフォルニア州医師免許、次いで米国内科専門医、さらに腎臓内科専門医などの資格を取得し、大学で内科医としてのキャリアを再開した。その間にも日本に帰れること

は実質的にありえないと覚悟して研究も、臨床も、教育にも励んでいた。在米10年でUCLAの内科の教授になった。ところが、教授として4年がすぎた頃に、突然のことだが、恩師の尾形悦郎先生との思いがけないご縁と説得で帰国(1983年)することになったのだ。

帰国後の活動の中心は東京であり、東京大学、東海大学と勤め、また内科、腎臓内科などの国内外の学会の活動を多く拝命していたのだが、熊本を訪ねる機会はほとんどなかった。「五高100年」(1998年)に参加し、熊本で開催された「九州医学界100年総会」(2001年)の基調講演にお招きを受けた機会の程度だった。この九州医学界総会での講演は、三井三池三川炭鉱炭じん爆発(1963年)の歴史的大事故の⁽¹⁶⁾一酸化炭素中毒の後遺症の患者さんを長い間にわたって献身的にケアされた三村孝一⁽¹⁷⁾医師が医師会の副会長であり、私が日本内科学会の理事長であった関係もあったからだと思うが、なんといっても先生のお嬢様の真紀子さんが、当時の私が医学部長を務めていた東海大学医学部の学生だったというご縁もあったからだろう。その講演の折には、真紀子さんは私が東海大学でどんどん増やしていた海外クラークシップ(ピーク時で5年生100名のうち15人ほどが海外で1-6か月間の臨床研修を行っていた)でオーストラリアに留学中だった。真紀子さんは卒業後には故郷に戻り、現在は大牟田市で医師として活動しているが、お父様のご意志を引き継いで、高齢になった一酸化中毒後遺症の患

者さんのフォロー活動にも参加されている⁽¹⁸⁾。

今回の熊本を襲った地震の被害を気にはなっていたのだが、昨年(2017年)11月に熊本市医師会で講演をさせていただく機会があり、蒲島知事を訪問し、旧知の元熊本大学副学長で「夏目漱石記念年100人委員会」委員長の小野友道熊本大名誉教授、事務局を担当している熊本日日新聞社の吉村隆之さんほかの皆さんにもお会いすることができ、その後の連絡も始まった。その翌日、実家のあった私の本籍「本荘5-13」(在米中に本籍を東京都に移していた)が今ほどこのかかを熊本市役所へ調べに行ってみると、なんと前日に講演をさせていただいた熊本市医師会会館のある場所だったこともわかった⁽¹⁹⁾。

私の両親と歴代の黒川家の長男夫妻が入る墓はこの本籍地の近くの実相寺にあったのだが、道路拡張など、二度の移転で郊外の清水墓苑に移されている。二年前の熊本の地震での清水墓苑の墓の被害はかなりなものだった。一方で実相寺の山門は古く、倒れそうな様相だった。荘厳寺では懐かしい方たち(ほとんどお互いに知らないのだが、懐かしいと感じたのは素直な気持ちだった)との時間を持つことができた⁽²⁰⁾。この熊本行きでは、私の旧友である成瀬正浩先生ご夫妻に大変お世話になった。

ところで14年余にわたる米国生活から昭和58年末(1983年10月)に息子、娘と家族四人で帰国した私は、牛込柳町の地、父が戦後に開業を始めた場所に仮住まい、平成元年にこれを建て直したの

が現在のすみかである。子供二人とも大きくなり、今や息子はクアランプール、娘はフィジー島で活動している。一人の孫むすめはバンクーバーで勉強している。

この牛込は、今の早稲田大学に近い馬場下町が夏目漱石の出生の場所であり、そこから10-15分ほどゆっくり夏目坂を歩くと私どもの住んでいる牛込柳町の交差点に出る、そこから拙宅へは2、3分ほどのところだ。この夏目坂の名は、当時このあたりの実力者の一人であった漱石の父親が命名したようだ(夏目漱石、「硝子戸の中」^②による)。漱石は小学校もいろいろ変わるのだが、歩いて通うのだから当然なのだが牛込あたりを中心に動いている。大学時代には本郷あたりにも住んでいるのだが、いつも牛込あたりにもどって居を構えており、最後の場所も喜久井町界隈で、我が家から歩いて数分のところ、いまは装いも新たに「漱石山房記念館」^②となっている。漱石(1867生)の他にも坪内逍遙(1859生)、尾崎紅葉(1868生)、泉鏡花(1873生)、加納作次郎(1885生)、北原白秋(1885生)、石川啄木(1886生)などの同世代の作家が牛込に居を構えていた。

ところで、戦後の区画整理などにもかかわらず、新宿区の元の牛込地区には市谷(牛込)柳町の他にも加賀町、薬王寺、東五軒町、袋町、余丁町、納戸町、弁天町、矢来町、弘方町、二十騎町、笹筒町、細工町、揚場町、北町、中町、南町などなど、昔の由来の名前が残っている町が66もあるようで、これは実に素敵なことだと

思う。子供たちにも、大人たちにも歴史を考えるきっかけもなっているとと思う。何でも「便利・べんり」などとして「〇〇区〇〇1-3-4」などの番号で振り分けていくなど、やめてほしいものだ。発想の軽さを感じる。それにしても、これも「二人の漱石」の縁なのだろうか、と思うと悪い気はしないものだ。

この英国ロイヤル・バレエ訪日、蒲島知事との知遇などから、予想もしなかったいきさつで、突然のように再び開けた熊本とご縁、そこからわたしの曾祖父の「黒川漱石」について再会できたことは全くの偶然のできごとだった。これを機会にもう少しいろいろ黒川漱石、私の家族の由来について教えていただけることになればありがたく、感謝にたえない。黒川漱石は細川藩士の養子で医師になったともいわれるし、子供の頃に江戸時代が終わり、明治になっているのだから、どのようないきさつで、どこで修業して医師になり、どんな活動をしていたのか、などなど、もっと知りたいと思っている。

参考文献

1. 夏目漱石 ウィキペディア <http://bit.ly/2FK4I86> による(2018年3月)。
2. 夏目漱石著「硝子戸の中」。
3. 「漱石の牛込」―牛込に生まれ牛込で生涯を終えた日本を代表する文豪、夏目漱石の幼少期の軌跡を辿る。牛込柳町界隈今昔：1-8(2014年秋号-2017年秋・冬号)。「牛込柳町界隈今昔：神楽坂から早稲田まで」編集室。

メールは studiomove777@power.odn.ne.jp yanagichouclub@blue.ocn.ne.jp

4. 実相寺、熊本市中央区本荘3丁目 <http://bit.ly/2r6hbY> (2018年4月)。
5. 莊厳寺、熊本市中央区妙体寺町 <https://bit.ly/2HAQzT7> (2018年4月)。
6. 当時、日本ばかりでなく多くの先進国でも結核が一番の死因であった。結核に効く初めての薬がストロプトマイシン <https://bit.ly/2hM26m5> (2018年4月)で、米国で発見され、1946-1948年に行われた史上初めてランダム化された臨床試験で有効性が証明された医薬品である。
7. 東大医学部の進学制度 <https://goo.gl/EH5aSi> 理科三類は1962年に始まる (2018年4月)。
8. 黒川清 ウェブサイト www.kyoshikurokawa.com の「プロフィール」。
9. 黒川清のウェブページから Episode vol.1 上「黒川清は、いったい何者なのか」 <https://goo.gl/1WdKdG> 下「積み重ねられる肩書」 <https://goo.gl/NB4kST>
10. 黒川清のウェブページから 2016年7月8日、「台北、英国ロイヤル・バンエ団、そして英国大使館で講演」 <https://goo.gl/ybX7ey> (2018年4月)。
11. 黒川清のウェブページから 2016年10月21日、「漱石、熊本、牛込、そしてわたし、不思議な偶然」 <https://bit.ly/2pn6VpN> (2018年4月)。
12. 黒川清のウェブページから 2016年12月26日、「熊本と二人の漱石」 <https://goo.gl/6arHHB> (2018年4月)。
この創作劇のパムフレット、私の紹介文など <https://bit.ly/2H5IAe8> <https://goo.gl/CLpFym> <https://goo.gl/AFBas7> (2018年4月)。
13. 浜畑賢吉、日本の俳優 <https://goo.gl/zSocKJ> (2018年4月)。
14. 「漱石」の意味は、例え(な)り <http://bit.ly/2CR8wL1> <https://bit.ly/2IwZsNG> (2018年4月)。
15. 三井三池三川炭鉱じん爆発 (1963年)。多くの死者と生存者の多くが一酸化炭素中毒後遺症で悲惨な年月を送ることになった。 <https://goo.gl/5CCqj5> (2018年4月)。
16. 「三村孝一、ひとと仕事」^{以下} 弦書房、編集発行三村孝一遺稿集刊行委員会。熊本大学医学部図書館、大牟田市立図書館など蔵書となつて閲覧できる。
17. 三村孝一、本岡真紀子他 「三池三川炭鉱じん爆発から40年 一酸化炭素中毒の長期予後」 pp.42. 社会関係研究 第15巻第2号 2010年3月
18. 2014年の西日本新聞の記事 <http://bit.ly/2F2s1Y6> (2018年4月)。
19. 私のウェブページから <https://goo.gl/pHTDM9> (2018年4月)。
20. 私のウェブページから <https://goo.gl/2szx56> <https://goo.gl/Gos7sg> (2018年4月)。
21. 漱石山房記念館 <https://goo.gl/QNFR8jK> (2018年4月) 私のウェブページ <https://goo.gl/SVvaGX> (2018年4月)。
22. 新宿区の牛込と近辺の町の名前 <http://bit.ly/2F9gJH> <https://bit.ly/2HjPYs0> (2018年4月)。